羅生門の夜の闇

辻　憲男（文学部教授）

芥川龍之介の「鼻」の主人公は、宇治の池ノ尾に住んだ。原拠になった今昔物語集によると、内供（ないぐ）は身浄く行法を修め、寺僧多く湯屋もにぎわったという（巻28第20）。芥川はこの高徳の僧の心理のあやをわびしく戯画化した。「こうなれば、もう誰も哂（わら）うものはないにちがいない」。元に戻った長い鼻に秋風が吹く。

1915年作の「羅生門」は都の夜の暗黒。「これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの」と老婆は言った。これを聞いているうちに、下人の心には、或る勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。「きっと、そうか」。嘲るような声で念を押した。「では、おれが引き剥ぎをしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、餓死をする体なのだ」。

原話は「悪行」の部の短い一話（巻29第18）。男は老婆の言いわけを聞き終わるや、すばやく物を奪い衣を剥ぎ取って走り去った。ここは無言である。男は盗みをしようと津の国から来た。夜を待って上層に昇った。初めは鬼か何かに見えて恐ろしかった。刀を抜いて「おのれは、おのれは」とおどした。老婆は手をすり合わせた。対する男の非情なことは心理劇ではなく、風を切る迅速さによって語られた。

小説の下人は初めぼんやり雨宿りをしていた。頻々と災害が起こり、主人から暇を出されたとある。百年前も千年前も、今の世と同じような不安があった。

羅城門は朱雀大路の南の大門。西国街道の終点。
いま京都市南区。津の国は兵庫県南東部・大阪北部。